

唄は人の多喜雄の唄がし

民謡歌手・伊藤多喜雄氏に聞く



今月の「ときめきインタビュー」は、民謡歌手の伊藤多喜雄さん。幅広い層から親しまれるこの人の唄の魅力、その秘密の一端を伺おうと、公演前のライブハウスを訪ねて……

大西 今、興味を持って、唄はもう入りますが、全体に民謡というなじみが薄いと感ずる。しかし、伊藤さんの唄は、私自身もそうですが、違和感なく入ってくる。やはり、小さい時から生活の中で聞かれていたからでしょうか。

協同作業が 生み出した民謡

伊藤 僕は今、民謡が受けることが異常ではなく、受けられなくなったことの方がおかしいと思っております。だって、音楽は生活が求めたものなんです。

生活の苦しみ、楽しませる必要が、その喜怒哀楽の中に唄や踊りが必要とされたんです。日本人は照れ屋ですから、見せ方、聞き方が下手なんです。それを照れないでできた人がたいていは、まあ田舎といつかしらかという土着の作業唄としてやってきた地域の人かなんてです。



▲大西 進氏 (作曲家・本紙編集委員)

魚業でも農業でもなんでも昔は人の力が必要で、二十人で作業する場合は、その二十人の力をついにまとめるために、どうしても掛け声や音頭とが必要だったんです。

かに長時間の重労働をリラックスマンながらしていくか、いかに、人をうまく使っていくかというテクニックだったかも知れない。

地域の共有財産 としてあった唄

伊藤 そして、仕事を終えて帰ってきたら、労働者は重労働を背中にしょって帰ってくるわけですから、今度は自分の時間を発散する。発散する場所もその人の置かれていた場によって違う。

上手か下手か、聞きたいか否か

大西 聞く人たちがいる、これは大事なことですね。伊藤 大事です。求められる場があれば、必ずそれに合わせたいという手、踊り手が登場するんですよ。

仕事の苦しみ、親父はいいい言いません。それより生きることに精一杯。そういう中で、唄は自分のためにもうたったんでしょ

今週の記事

- ☆〈新連載〉「響鳴 響感 和太鼓わーど」 8面
☆池子の森の(みどり かがやけ) 8面
☆〈連載〉「ミュージック・トゥデイ」(和田静香) / 「うたごえ天国」(白六郎) / 「郷土のうたと踊りめぐり」-水口雅子(荒木一) / 「ちよっと拝見コスチューム」
☆チェンバロ製作に挑む -高橋靖志さん(乾みや子) 7面

紅葉の便りが届いて、山に初雪の知らせが聞こえてきて、各地から色づく秋の賑わいが日々届いてくる季節です。椋りの秋、芸術の秋、食欲の秋、うたごえの秋、秋は忙しいですね。
☆ ☆
この間「美女と野獣」というディズニーのアニメ映画を見ました。皆さんよくご存知のお話です。「外見で判断するのではなく、内面の美しさを発見しよう」といったテーマが最初のタイトルから鮮明に出されていて、快いテンポの画面と音楽で前半はミュージカルの様。後半のスリルに思わず身をのり出し最後はハッピーエンドというわけです。
映画も素敵でしたが私の心のこったのは映画を見ていた人たちです。二人連れも多かったのですが勿論シングルの人もいました。何だかみんな淋しいんだなあーという感じ。愛を求めているのがストレートに伝わってきます。
☆ ☆
その足でうたごえの合唱発表会に行きました。みんな忙しそうでも張り切っているようにもあり、あまり人の事は面倒見きれないという感じもあります。
人と人のつながりが薄れている時代に私たちのサークルの仲間内だけの親しさでなく、一人でも未知の友人を増やそうとする運動を広げて祭典を迎えたいですね。神奈川県連日夜おそく迄がんばっている仲間達に何か差し入れをしませんか。私もリンゴを二箱送らせてもらいます。(T)